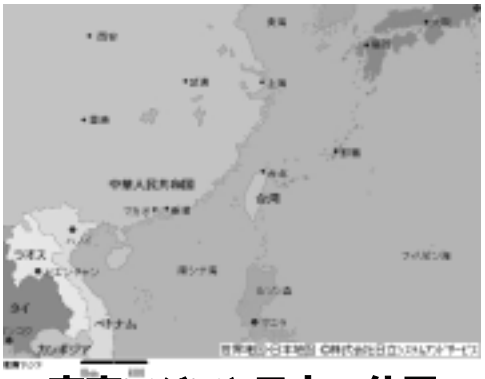
東南アジアと日本
1

前近代の日本における
外国認識

日本とのかかわり

日本と東南アジアは
たがいにどのような
かかわりを
持ってきたのだろうか？



東南アジアと日本の位置

前近代

唐、天竺

「カラ」とはどこか？



朝鮮半島南部と九州北部

カラ

- ・韓(から)：朝鮮古代の諸国
- ・唐(から)：海外すべて

・韓国南部、慶尚南道
・洛東江下流域を中心、中流域までを含む地域
・伽耶、加耶，伽謂，加良，駕洛，任那

カラ諸国

- ・三国時代前半期に繁栄した
- ・５６２年に新羅に併合される
- ・三国時代後期にかなりの自治を許されていた

カラ諸国

- ・古寧(慶北，咸昌)
- ・卓淳(大邱)
- ・碧珍(星州)
- ・大伽耶(高霊)
- ・非火(慶南，昌寧)
- ・多羅(陜川)
- ・阿羅(咸安)
- ・金官(金海)
- ・小伽耶(固城)

今昔物語

・天竺（インド）
・唐（から）
・本朝（日本）

朱印船貿易

異国渡海御朱印状といわれる外国向けの渡航証明書，あるいは船籍証明書を与えられて渡航した船舶

朱印船貿易

- ・朱印船制度の起源：
  1592年(文禄1)豊臣秀吉の創設説
  1601年(慶長6)の徳川家康の創設説
  後者の学説が有力
- ・残存最古の異国渡海朱印状は１６０２年
- ・１６０１年以前の南方諸地域への渡航船は，史料では渡唐船と称する

朱印船貿易

- 時期：１６０１年以後鎖国政策の展開した１６３５年(寛永12)まで
- 渡航総船数：350～360艘，年平均約10余艘が従事
- （金地院）以心崇伝の《異国御朱印帳》《異国渡海御朱印帳》に，年度別・地域別に記録あり

朱印船貿易

- 渡航地：安南国の東京(トンキン)，交趾(コーチ)国のツーラン，フェフォ，東埔寨(カンボジア)国のプノンペン，暹羅(シヤム)国(タイ)のアユタヤ，呂宋(フィリピン)のマニラ郊外のディラオ・サン・ミゲル
- 朱印船主：長崎の末次平蔵，船本弥平次，荒木宗太郎，糸屋随右衛門，京都の角倉了以・与一，茶屋四郎次郎，伏見屋，堺の伊与屋

朱印船末吉船、
寛永１０年（１６３３年）
京都・清水寺に奉納されたもの

朱印船末次船、
寛永１１年（１６３４年）
長崎・清水寺に奉納されたもの



朱印船の渡航先

朱印船貿易

- 朱印船の経営：船主は幕府より朱印状の交付をうけ，船舶や資本銀や商品を準備し，船長や船員を雇い入れ，ついで貿易を希望する商人を募集して客商とし，船賃をとって同乗させた
- 船の規模：茶屋船の場合，乗員は300人余，船の長さ45m，幅8.1m
- 朱印船の終焉：１６３１年(寛永8)奉書船制度による貿易の制限
- １６３５年奉書船の海外渡航も全面的に禁止

フランシスコ･ザビエル

ザビエルの書簡

もし日本国王が私たちの信仰に帰依することになれば、ポルトガル国王にとっても、大きな物質的利益をもたらすことでしょう。堺は非常に大きな港で、たくさんの商人と金持ちがいる町です。日本の他の地方よりも銀や金がたくさんありますので、この堺にポルトガルの商館を設けたらよいと思います。

物質的な利益に関係なく、神への愛だけで、神父たちを渡航させる船を出す者は誰もいないと信じます。

「聖フランシスコ･ザビエル全書簡」3、河野純徳訳、東洋文庫

南洋日本町

- 1636年(寛永13)の第4回鎖国令発布までの約30年間に発給した朱印状の数は合計356通
- 渡航者：海賊，船員，商人，失業者，追放キリシタン等
- 出国日本人総数：延べ10万人以上
- 森本右近太夫の落書き（寛永9年）

肥州熊本、森本右近太夫一房の墨書
アンコールワット回廊
寛永9年（1632年）
正月に参詣
老母の後生を祈る
ため仏像4体を建立
父義太夫は
加藤清正の重臣

「祇園精舎の図」

「祇園精舎の図」

- 実際にはアンコールワットの平面図
- 長崎の通辞島野兼了が実際に現地へ赴いて実測図を作成したもの
- 鎖国後は水戸・徳川家に所蔵されてきた
- 現在、水戸、彰考館蔵

南洋日本町

- 所在地：7箇所
  ベトナム中部のフェイフォ(現在のホイアン)，トゥーラン(ダナン)，タイのアユタヤ，ルソン島のマニラ郊外のディラオとサン・ミゲル，カンボジアのプノンペンとピニャールー
- 雑居地：マカオ以南に少なくとも20ヵ所
- ほとんど東南アジアの全域に及ぶ

ベトナム
ホイアン
に残る
日本人の墓
（17世紀）

ベトナム・ホイアンの日本橋

南洋日本町

- 最盛期の推定人口：マニラ郊外の3000人，アユタヤの1500人
- 7ヵ所の全日本人町総計5000人以上
- 頭領には日本人が選ばれ、自治権を付与
- アユタヤ日本人町の頭領，山田長政
  日本人傭兵隊長
  （政敵により1630年に毒殺）

山田長政の軍船
寛永3年（1626年）に故郷静岡の浅間神社に奉納した絵、原画は天明8年に焼失

アユタヤ・日本義勇軍の行列
原画はアユタヤ、ヨム寺院にあったが、
その手写本がバンコクの文書館に現存



Central Thailand

Ayutthaya
by
Vincenzo
Coronelli
in 1696

Suarez, T., *Early Mapping of Southeast Asia*, 1999, Periplus, H.K.

バンコク郊外の水上市場

アユタヤの
旧王宮跡

南洋日本町

- 大部分は商業に従事
- 朱印船のために，生糸，鹿皮，鮫皮，蘇芳木などの商品を買い付け
- 鎖国により、しだいに現地社会の中に吸収
- フェイフォ，アユタヤ，ディラオには1690‐1708年ごろまで何人かの日本人が生存（オランダの記録）

徳川時代の海外認識

新井白石
1657－1725

- 名は君美(きんみ)通称は与五郎，伝蔵，勘解由。字は在中，済美、紫陽，錦潅山人，天爵堂
- 関ヶ原の戦の後，主家とともに所領を失う父正済(まさなり)は江戸へ出奔し，当時流行のかぶき者のような生活を送る
- 上総国久留里藩土屋利直に仕え，信任を得て目付を務めた

新井白石

- お家騒動にまきこまれ，1677年(延宝5)父子ともに土屋家から追放
- 1682年(天和2)大老堀田正俊に仕官
- 正俊の死後，91年(元禄4)堀田家を去り，再び牢人生活
- 1686年(貞享3)木下順庵に入門

新井白石

- 1693年順庵の推挙により甲府藩主徳川綱豊(後の6代将軍徳川家宣)の侍講となる
- 1704年(宝永1)家宣が叔父5代将軍綱吉の養子
- 白石も幕臣として寄合に列せられた。
- 1709年家宣が将軍となる
- 厚い信任のもとに幕府政治に発言
- 11年(正徳1)従五位下筑後守に叙任、知行地1000石
- 翌12年家宣の死後も側用人間部詮房とともに幼将軍家継を補佐

新井白石

- 正徳の治：通貨改良，貿易制限，司法改革などに努力
- 1716年(享保1)吉宗が将軍
- 政治上の地位を失い，晩年は不遇

著書

- 〈藩⼭譜〉各大名家の事跡を系譜的に述べた
- 〈読史余論〉：授関政治から家康制覇に至る間の政治の変転を論じた
- 〈古史通〉：神話に合理的解釈を試みたもの
- 地誌：〈蝦夷志〉〈南島志〉〈琉球国事略〉
- 〈西洋紀聞〉〈采覧異⾔〉：シドッチの尋問によって得た知識に基づく
- 言語･文字の研究先駆者：〈東雅〉〈東音譜〉〈同文通考〉
- 自叙伝〈折たく柴の記〉

シドッチ　1668‐1714
Giovanni Battista Sidotti

- イタリア人のカトリック司祭
- 禁教令下の日本に潜入した最後の宣教師
- 1704年マニラに到着して日本語を学ぶ
- １７０８年(宝永5)スペイン船で屋久島に単身上陸
- 直ちに逮捕、長崎を経て江戸へ送られ，小石川切支丹屋敷に幽閉され5年後に没
- 新井白石、シドッチを尋問
- 鎖国下の世界知識の源となり，洋学の基

新井白石の合理主義

シャム･チャンパの条

ジャガタラの条

スマトラの条

オランダの条

西川如見
1648‐1724(慶安1‐享保9)

- 江戸中期の長崎の天文学者
- 名は忠英，通称は次郎右衛門。如見のほか求林斎，金梅庵，淵梅軒とも号す
- 商家の生れ
- 儒学を南部草寿に学ぶ。
- 長崎流天文学を受け継ぎ，中国の天文学に西洋天文学を加味した研究を進める
- 1719年(享保4)将軍徳川吉宗に招かれ下問に答えた

著書

- 〈天文義論〉(1712)：天文学概説書
  儒教的自然観をとりながらも，天を〈命理の天〉と〈形気の天〉に分け，実証主義的思考を示す
- 〈日本水土考〉(1720)：日本を地球上の中華とみる見地を展開
- 1695年版〈華夷通商考〉
- 改正版：〈増補華夷通商考〉(1708)：通商的観点の世界地誌で，海外事情の普及に大きく貢献
- 〈長崎夜話草〉：啓蒙書、ジャがタラお春
- 〈西川如見遺書〉18冊(1898‐1907)

華夷通商考

- 江戸時代最初の本格的な世界地理書
- 1695年(元禄8)初版2巻
- 1708年(宝永5)増補版5巻を刊行
- 中国を主とするアジア諸国やオランダ以下西洋諸国について，位置・風土・産物などを通商の見地から記述

増補
華夷通商考
(宝永６年版)
表紙

中扉

序文末尾の出版年号

明朝と清朝の風俗

ベトナムの風俗

南京船と福州船

オランダ船

オランダ人の風俗

漂流民

漂流民

- 鎖国体制下の犠牲者
- 千石船と国内経済の発達
- 消費都市の発展、江戸、大阪、博多
- 航海技術の衰退、山見航法
- 送還体制、中国、朝鮮とはある
- 海外知識の伝達と普及

大黒屋光太夫
1751－1828

- 幸太夫とも書く
- 伊勢国亀山藩領南若松村(現，三重県鈴鹿市)亀屋四郎次の子
- 父方親戚の家を継ぎ大黒屋光太夫と改む
- 木綿商売を営む



伊勢湾と三重県北部

大黒屋光太夫

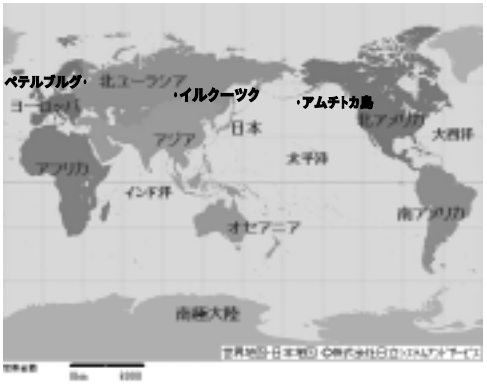
- 天明2年12月(1783年1月)
- 白子港の廻船神昌丸に木綿，米などを積んで江戸に向かう途中難船
- 8ヵ月後アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着



アリューシャン列島



イルクーツク



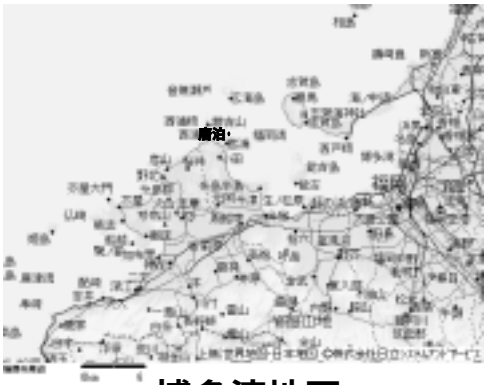
大黒屋光太夫

- 1787年：ロシアの毛皮商の手代に連れられてカムチャツカに渡る
- 1789年2月：チギリ，オホーツク，ヤクーツクを経てイルクーツク着
- ペテルブルグ学士院会員のガラス工業家エリク・ラクスマンの知遇を得る
- 1791年：ペテルブルグに同行して女帝エカチェリナ2世に謁見，帰国を許される
- 1792年：エリクの子、遣日修交使節のアダム・ラクスマンの船で根室に帰着

- 将軍家斉，松平定信らに見聞を伝える
- その後、番町の薬園で一生を終えた
- 〈北槎異聞〉〈漂民御覧之記〉〈北槎聞略〉
- 鎖国下での国際認識の発展に大きく貢献

孫太郎（孫七）
1747？－1807

唐泊



博多湾地区



孫太郎の行程図

孫七58歳の時の肖像画